

日本語科目における協働評価学修を取り入れた経験学修サイクルの可能性

The potential of experiential learning cycles incorporating collaborative assessment learning
in Japanese language courses

杉本 亜由美

高田短期大学キャリア育成学科

Ayumi Sugimoto

Department of Career Development, Takada College

195 Isshindentoyono, Tsu-shi, Mie, 514-0115 Japan

キーワード：キャリア教育、ビジネス実務教育、敬語教育、経験学修サイクル、協働評価学修

Key words : Career education, Business practice education, Education in honorific language,
Experiential learning cycle, Collaborative evaluation study

抄録

本研究では、高等教育機関における初年次学生を対象に、日本語科目を通じて「敬語力」の育成を目指し、教員から与えられた目標ではなく、自ら学修目標や学修計画（授業以外の時間における経験学修）を考え、実践し、自身の経験を協働で振り返る時間（協働評価学修）を設ける経験学修モデルを実践した。実践の効果は、客観的尺度として事前事後に実施した敬語テスト、主観的尺度として事前事後に実施した授業アンケートより測定することとした。

調査の結果、定量的データ、定性的データの両方より授業効果を確認することができ、さらに、記述式アンケート結果より、受講学生の「敬語力」が醸成された可能性を確認することができた。また、事前テストから事後テストにかけて最も得点上昇率が高かった学生は、過去1か月に最も読書冊数が多かった。また、事前敬語テストの結果が上位25%の学生について、「1週間のアルバイトの時間の長さ」、「1週間の地域の人々との会話時間の長さ」、「1週間の学内における教職員との会話時間の長さ」の相関性が確認された。

1. 背景

近い将来、卒業後企業等で活躍するであろう、高等教育機関に属する学生はどのような能力を身に付けるべきなのか。企業人ともなれば、敬語なくしては業務が進まなくなるゆえ、高等教育機関における敬語教育の重要性は増すと、杉本 (2019) [1]でも指摘されているように、企業等への就職を控えている学生が、高等教育機関で敬語力を含むコミュニケーション能力を身に付けねばならないということは必須であると理解できる。

企業等で働く際、敬語を使用せずに人とコミュニケーションを取ることは不可能であり、高等教育機関で学ぶ学生が身に付けておくべきと考えられる「言語能力」、とりわけ「敬語力」に焦点を当て、どのような教育方法が有効なのかを本研究において考察する。

学生が敬語力を身に付けるためには、詳しくは後述する、意識教育を主張する蒲谷 (2017) [2]や、実践教育を推奨する菅井 (2009) [3]にあるように、敬語に関する文法的知識を与える知識教育だけではなく、場面毎のロールプレイング等の実践教育や、授業時間以外の普段の生活における敬語使用体験が有効なのではないか。また、教員は学生自身が能動的に敬語を学べる環境をファシリテートすることが効果的なのではないかと考えた。

本研究では学生自らが、自身の敬語力向上に繋がる学修目標を定め、その目標を達成できるように学修計画を立て、授業内外で学修を実践し、実践した学修内容を振り返り、協働で評価し合い新しい気づきを得て次の経験に活かす、を1サイクルとした「経験学修サイクル」を複数回繰り返す。この「協働評価学修を取り入れた経験学修サイク

ル」の繰り返しが、学生のコミュニケーション能力育成に繋がるのではないかという仮説を立て、これを実証すべく、高等教育機関に属する初年次学生を対象とした日本語選択科目「日本語Ⅱ」授業内で協働評価学修を取り入れた経験学修サイクルを試み、その効果を、事前事後テストや、事前事後アンケート、事後聞き取り調査の結果分析で実証することとした。

2. 先行研究、本研究の位置づけ

2.1. 敬語教育に関する先行研究

敬語教育に関する先行研究としては、蒲谷 (2017) が挙げられる。蒲谷 (2017) は敬語教育の新視点として、敬語を、待遇コミュニケーションの「形式」の一部として位置づけ、常に「コミュニケーション主体」－「場面」－「意識」－「内容」－「形式」という連動の中に捉え、「自分が一人のコミュニケーション主体として、この場面においては、このようなコミュニケーションをしていこうとする意識があるから、こういう敬語を使うことに意味がある」と自覚しつつ待遇コミュニケーションを行っていく力を養うことこそが真の敬語教育につながる」と結び、敬語に関する意識教育の必要性について述べている。

また、学生の敬語意識調査の先行研究として菅井 (2009) が挙げられ、菅井 (2009) は、A 大学 1 年生に敬語使用に関するアンケート調査を実施し、その結果、学生の敬語学習の場がアルバイト先であり、敬語の誤用実態も接遇に関連したものが非常に多かったことを明らかにし、高等教育機関の敬語教育は、単語の敬語文法的変換を教えることよりも、場面毎の具体的な敬語使用例、応対例、考え方などを明示したコミュニケーション教育として捉え直し、実践的应用につながる内容にする必要性を唱えている。

敬語教育の先行研究としては、宮本 (2007) ^[4] が挙げられる。

宮本 (2007) は、高等教育機関における敬語表現教育の実践を踏まえながら「敬語の指針」を視野に入れて敬語教育の課題について考察し、今後の目指すべき課題として、「教育現場からの発想による小学校、中学校、高等学校、大学に至るまでの体系的な敬語教育カリキュラムの作成」「敬語に限定するのではなく、待遇表現研究やポライトネス理論も組み入れた視点からの現代敬語論の構築」「学

習者の言語生活の実態をふまえた上での実の場に即した敬語表現に関する学習材の開発」「日本語を母語としない学習者に配慮した、新しい日本語敬語体系の樹立」「コミュニケーション能力の向上を目ざし、生涯学習の観点からの敬語教育の見直し」の 5 つを挙げ、学生が敬語力を身に付けるにはアドバイスし合える人間関係を築くことの重要性を述べている。

以上、敬語教育に関する先行研究を挙げたが、蒲谷 (2017) は意識教育、菅井 (2009) は実践教育、宮本 (2007) は敬語力を身に付けるのに必要な人間関係構築の重要性について明らかにしているものの、高等教育機関で学ぶ学生が敬語力を身に付けられる具体的な実践授業についての報告はほとんど無く、敬語教育に関する具体的な教育方法における実証的研究データが求められる。そこで、本研究では、敬語教育を「場面を意識した待遇コミュニケーション教育」「場面毎の具体的な敬語使用例、応対例、考え方などを明示したコミュニケーション教育」と定義付け、筆者が担当した高等教育機関における、キャリア教育関連基盤科目において、学生が敬語力を身に付けられる具体的な授業内容を、その実証を含めて提示する。

2.2. David Allen Kolb の経験学習

David Allen Kolb (1984) ^[5]によれば、経験学習とは自身の経験から学びを得るプロセスを指す。そのプロセスは、「具体的な体験」→「経験の観察・反省」→「反省に基づく抽象概念の形成」→「新しい概念をテストする」→「具体的な体験」、これらの過程を繰り返すことで、自身の経験から気づき、身をもって実践することで失敗を予測できるようになり、自身の成長につながると述べられている。

経験学習は、医療の世界において実践報告が数多く寄せられているが、杉本 (2024) ^[6]ではビジネス実務科目に取り入れ、一定の効果がある可能性を実証している。本研究では、これを敬語教育に応用したいと考えた。授業開始前に受講学生自ら敬語力向上に繋がる到達目標を設定し、その目標を達成するための学修計画を、経験学修に結び付け、授業で獲得した知識（主に敬語や接遇等、コミュニケーション能力に関する知識）を、授業内の協働学修で実践するだけでなく、授業以外の時間で積極的に敬語、接遇用語を使う機会を設けるように学生を促し、学生は、その経験を次の授業内

で振り返り、可視化、概念化し、それらをグループで共有し、協働評価に繋げ、次の経験に活かす、を1つのサイクルとした「経験学修サイクル」を複数回繰り返すこととした。

2.3. 研究目的

先述のとおり、本研究では敬語教育を「場面を意識した待遇コミュニケーション教育」、「場面毎の具体的な敬語使用例、応対例、考え方などを明示したコミュニケーション教育」と定義付け、未だ数少ない高等教育機関における敬語教育に関する実証的研究データの蓄積に貢献すべく、後述する仮説（「協働評価学修を取り入れた経験学修サイクルの実践は学生の敬語力向上に有効である」、「本をよく読む学生、アルバイトの時間が長い学生、地域住民とよく話す学生、学内で教員とよく話す学生は、そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ」）を検証し、学生のコミュニケーション能力育成に繋がるビジネス実務科目プログラムのデザイン、構築を、その目的とする。

また、本研究においては、高等教育機関における学びを、学び修めること、学んで身に付けることと捉え、「学習」表記よりも「学修」表記がふさわしいと考え、「協働評価学修」や「経験学修モデル」と表記することとする。

3. 研究方法

3.1. 調査概要

キャリア教育関連基盤科目である 2023 年度後期選択科目「日本語Ⅱ」にて、協働評価学修を取り入れた経験学修サイクルを実践し、その効果を客観的尺度（定量的データ）として事前・事後テスト、主観的尺度（定性的データ）として事前・事後アンケートそれぞれの結果を分析することによって導く。

3.2. 対象科目、対象者、授業内容

対象科目は 2023 年度後期選択科目「日本語Ⅱ」（2023 年 9 月～2024 年 2 月実施）、対象者は受講学生 44 名（A 大学初年次学生）とする。使用テキストは、『大学生のための実用日本語表現ドリル』（三省堂）⁷⁾とし、15 回の授業内容は以下である（表 1）。各授業内では、テキストで敬語に関する文法的知識を獲得した後（セルフワーク）、グループに別れてロールプレイングなどの実践練習を行

い（グループワーク）、その後、自身の学修計画が予定通りに進んでいるかを振り返り、グループで意見交換し共有する時間を設けることとした（本研究ではこれを、「協働評価学修」と呼ぶ）。

表 1. 2023 年度後期「日本語Ⅱ」15 回授業内容

回数	学修内容
1	コミュニケーション能力の重要性 敬語の基本知識 事前アンケート・事前敬語テスト
2	公的機関の窓口で電話を掛ける①ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
3	公的機関の窓口で電話を掛ける②ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
4	公的機関の窓口で手続きをする①ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
5	公的機関の窓口で手続きをする②ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
6	企業に問い合わせの電話を掛ける①ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
7	企業に問い合わせの電話を掛ける②ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
8	企業の受付で質問する①ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
9	企業の受付で質問する②ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
10	オープンキャンパスの受付係①ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
11	オープンキャンパスの受付係②ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
12	オープンキャンパスの案内係①ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
13	オープンキャンパスの案内係②ドリル→実践演習→自己評価 相互評価
14	振り返り①学修内容を整理して纏める
15	振り返り②事後アンケート 事後敬語テスト 半構造化インタビュー

課題：授業で身に付けた敬語に関する知識を普段の生活の中で活用し、その経験内容を授業内で振り返り、受講学生同士で共有する【経験学修サイクル】

また、経験学修サイクルの実践を課題とし、1 週間どこで誰と敬語を使って話したか、困ったことやうれしかったこと、今後の対策について「敬語体験記述シート」（表 4、後述）に記入し、授業毎提出することとした。さらに、15 回の授業全体の流れや、各授業の 90 分の流れを図表に表すと以下のようなになる（表 2、表 3）。

表 2. 15 回の授業全体の流れ

第1回授業： 学生自身で到達目標設定，学修計画を立てる 事前アンケート 事前テスト テキスト学修（セルフワーク グループワーク）
↓
第2回授業～第14回授業： テキスト学修（セルフワーク グループワーク） 自身の学修（授業での学習 課外学習）の振り返り
↓
第15回授業： 事後アンケート 事後テスト 目標達成度の確認

表 3. 各授業の 90 分の流れ

テキスト学修 セルフワーク：新しい知識を受容する
↓
グループワーク：受容した知識を実践して慣れる
↓
協働評価学修：自身の経験の内容を振り返り，協働で評価し合うことによる概念化，課題を見極め，次の経験に活かす【経験学修サイクルの実践】

3.3. 敬語体験記述シートの使用

経験学修サイクルを実践するにあたり，普段の生活の中で率先して敬語を使用するよう，受講学生を促し，授業内で自身の敬語体験を振り返る時間を設ける際，以下の表 4 にある「敬語体験記述シート」を使用した。シートには，経験内容を具体的に記述する欄（「いつ，どこで，誰と，どんなことを話しましたか。」），経験を内省し言語化する欄（「スムーズに話せたと思いますか。上手く話せなかった場合は，どのあたりが上手くいかなかったのかを具体的に述べてください。」），経験内容から導き出せる仮説を記述する欄（「今後，どのようにすれば，今より敬語力が身につくと考えますか。記述した体験をどう活かすか具体的に述べてください。」），最後に，次回の敬語体験への意気込みを記述する欄を設け，受講学生は授業内の振り返りの時間で記述し，グループで意見交換（協働評価学修）をした後，毎回提出してもらった。

表 4. 敬語体験記述シート

項目	自分の言葉で具体的に記入すること
いつ，どこで，誰と，どんなことを話しましたか。	
スムーズに話せましたか。どのような所が上手くいきませんでしたか。	
今後，どのようにすれば，今より敬語力が身につくと考えますか。	
次回の敬語体験への意気込みを述べてください。	

3.4. 事前・事後アンケート内容

まず，本研究における仮説を以下に示す。

仮説①協働評価学修を取り入れた経験学修の実践は学生の敬語力向上に有効である。

仮説②本をよく読む学生は，そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ。

仮説③アルバイトをしている学生は，そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ。

仮説④地域住民との触れ合いが多い学生は，そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ。

仮説⑤学内で教員との会話が多い学生は，そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ。

上記の仮説に則り，事前アンケートの質問内容は以下とした。

質問 1: この科目を履修する理由を教えてください。

質問 2: この科目の授業でどのようなことを学びたいと考えていますか。記入してください。

質問 3: この科目で身に付けた知識や技能は，将来，どのような場面で役に立ちそうだと思いますか。現時点でのあなたの考えを自由に述べてください。

質問 4: この科目の授業を受けることで獲得したい知識や能力など，自分自身で目標を決めてください。

質問 5: 先ほど記入した目標を達成させるためには，どのようなことを努力すれば良いと考えますか。具体的に計画を立ててください。

上記，受講学生に質問 1 から質問 5 までの回答として，自身の考えを自由に記述してもらった。

質問 6: 過去 1 か月に読んだ本の冊数を教えてください。

上記の質問に、漫画を除いて、過去1か月間に読んだ本の冊数を数値で記述してもらった。

質問7: 1週間にどの程度アルバイトをしているか時間数で記入してください。

上記の質問に、過去1週間のアルバイト時間を数値(週当たりの時間数)で記述してもらった。

質問8: 1週間でどの程度、学内で教員や職員と話したか時間数で記入してください。

上記の質問に、過去1週間で何分程度、学内で教員や職員と話したかを数値(週当たりの時間数)で記述してもらった。

質問9: 1週間でどの程度、地域の人と話したか時間数で記入してください。

上記の質問に、過去1週間で何分程度、地域の人々と話したかを数値(週当たりの時間数)で記述してもらった。

さらに、全授業終了後に実施した事後アンケート内容は以下である。

質問1: 授業を受けて、敬語力が身に付いたと思いますか。

上記の質問に、「思う」、「思わない」、「わからない」で回答してもらった。

質問2: 質問1の理由について述べてください。

上記の質問に、自身の考えを自由に記述してもらった。

質問紙の妥当性について、質問内容は「現在の社会状況の変化に伴う日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。(2024年3月実施調査)」という、本研究に関連性の高い目的のもと、1995年より文化庁が実施している、全国の16歳以上の約6000人を対象とした「国語に関する世論調査(2024年3月実施)」にある敬語に関連する質問事項が本研究に相応しいと解釈し、参考とした。さらに、仮説を検証するための質問項目を加え、妥当性は担保しているものとする。

3.5. 事前・事後敬語テスト内容

事前・事後に実施した敬語テストは、日本語検定2級やサービス接遇検定2級の問題を参考にして作成した。単に敬語に関する文法的な知識を測るものでなく、敬語スキルを測定できるものが相応しいと考え、より、実技テストに近い具体的な記述を求めるものとして、普段の生活や仕事など

に関する様々な場面を想定し、与えられた場面ごとの状況に応じた相応しい言葉遣いを記入するものとした(満点15点)。

テスト内容の妥当性については、日本語検定、サービス接遇検定ともに、文部科学省後援の検定試験であり、それぞれに敬語力を測定する分野が設けられており、場面や相手に応じて尊敬語や謙譲語の使い分け等、相応しい言葉遣いを問うものであるゆえ、仕事や普段の生活における敬語力を測ることが十分に可能であり、本研究の敬語テスト内容の妥当性は担保できていると考える。

3.6. 事後聞き取り調査内容

授業終了後に実施した事後聞き取り調査(学生はランダムに抽出した8名、うち、事前テストから事後テストにかけて、高く得点の伸びた受講学生13名の中の3名、それ以外の31名の中の5名とした)の内容は以下である。

質問1: 経験学修サイクルを実践してみているかがでしたか。上手くできたと思いますか。

質問2: 授業で敬語が身についたと思いますか。そう思う理由も教えてください。

質問3: この科目で得た学びを、今後どこで、どのように活かそうと思いますか。

3.7. 分析方法

仮説①が支持されているかどうかを確かめるために、客観的尺度(定量的データ)として、事前敬語テストと事後敬語テストの平均点の差が統計的に有意か確かめるために、有意水準1%で対応のある t 検定(両側検定)を施す。

仮説②から⑤が支持されているかどうかを確かめるために、主観的尺度(定性的データ)として、事前敬語テストの得点が高かった上位25%にあたる11名の事前アンケート結果と、それ以外の学生の事前アンケート結果を比較して検証する。

さらに、事後アンケートと事後聞き取り調査の結果については、事前テストから事後テストにかけて上昇率が高かった学生13名と、それ以外の学生31名の結果を分類し、比較することとした。

アンケートにおける質問が正しく測定できているかという信頼性については、内的整合性を検討するために、各質問項目の回答記述内容を筆者と、統計学を専門領域とする元大学教員2名でコーディング、ナンバリングし、実施者間一致率を k 係

数で確認した後、クロンバック α 係数を求めることとする。

4. 結果・考察

4.1. 事前アンケート, テスト結果, 考察

受講学生の事前アンケートのうち、質問 1 から質問 5 までの結果は以下である (n=44)。

質問 1: この科目を履修する理由を教えてください。

- ・コミュニケーション能力を身に付けたいから 21 名 (47.7%)
- ・敬語を使えるようになりたいから 11 名 (25.0%)
- ・単位が欲しいから 3 名 (6.8%)
- ・語彙力を身に付けたい 3 名 (6.8%)
- ・就職に役立ちそうだから 2 名 (4.5%)
- ・正しい日本語を身に付けるため 2 名 (4.5%)
- ・文章力を身に付けたいから 2 名 (4.5%)

質問 2: この科目の授業でどのようなことを学びたいと考えていますか。記入してください。

- ・コミュニケーション 32 名 (72.7%)
- ・敬語 9 名 (20.5%)
- ・ビジネスに関する知識 1 名 (2.3%)
- ・職場やビジネスに役立つこと 1 名 (2.3%)
- ・語彙 1 名 (2.3%)

質問 3: この科目で身に付けた知識や技能は、将来、どのような場面で役に立ちそうだと思いますか。現時点でのあなたの考えを自由に述べてください。

- ・仕事、ビジネスの場面 41 名 (93.2%)
- ・アルバイトの時 3 名 (6.8%)

質問 4: この科目の授業を受けることで獲得したい知識や能力など、自分自身で目標を決めてください。

- ・コミュニケーション能力を身に付ける 31 名 (70.5%)
- ・敬語力を身に付ける 5 名 (11.4%)
- ・日本語力 3 名 (6.8%)
- ・正しい言葉遣い 3 名 (6.8%)
- ・第一志望の職に就くために必要な知識 2 名 (4.5%)

質問 5: 先ほど記入した目標を達成させるためには、どのようなことを努力すれば良いと考えますか。具体的に計画を立ててください。

(紙幅の都合上、記述内容の要点を纏めて一部を抜粋した)

- ・実生活で敬語を使って積極的に話す等、経験学修サイクルの実践に結び付くもの 35 名 (79.5%)
- ・授業で学んだことを実践する等、実践内容だけでなく、授業で得た知識も含めたもの 7 名 (15.9%)
- ・授業内容を復習する 1 名 (2.3%)
- ・日本語検定テキストにある問題を毎日解く 1 名 (2.3%)

考察: 「日本語Ⅱ」の履修理由として、「コミュニケーション能力を身に付けたいから」、「敬語を使えるようになりたいから」計 72.7%と、7 割以上の受講学生がコミュニケーションに関連する理由を挙げていた。また、「日本語Ⅱ」の授業で学びたいこととして、「コミュニケーション」、「敬語」計 93.2%と、コミュニケーションに関連する回答が 9 割を超えており、受講学生のコミュニケーション能力への意識の高さが窺える。それゆえ、質問 4 の「この科目の授業を受けることで獲得したい知識や能力など、自分自身で目標を決めてください。」に対する回答として、「コミュニケーション能力を身に付ける」が 7 割を超えた。次いで、「敬語力を身に付ける」が 11.4%、「日本語力」6.8%、「正しい言葉遣い」6.8%等の、コミュニケーション能力に関連性の高い目標が挙げられていた。

さらに、目標を達成するための具体的な学修計画としては、「アルバイト先でお客様を接客する時、積極的に敬語で会話する」「アルバイト先で上司と会話する時、誤用を正してもらう」「これから、部活で先輩と話をする時は正しい敬語で話すように心がける」等、「実生活で敬語を使って積極的に話す等、経験学修サイクルの実践に結び付くもの」が 8 割近くを占めていた。その他、「授業で学んだことを実践する等、実践内容だけでなく、授業で得た知識も含めたもの」という、知識と実践の両方を兼ね備える学修計画が 15.9%であった。

先述したとおり、アンケートにおける質問が正しく測定できているかという信頼性について内的整合性を検討するために、各質問項目の回答記述内容をコーディング、ナンバリング (2 名で実施、 k 係数 0.88) し、クロンバック α 係数を算出したと

ころ、全体尺度について 0.81 であり、高い値が得られた。

なお、質問 6: 過去 1 か月に読んだ本の冊数を教えてください、質問 7: 1 週間にどの程度アルバイトをしているか時間数で記入してください、質問 8: 1 週間でどの程度、学内で教員や職員と話したか時間数で記入してください、質問 9: 1 週間でどの程度、地域の人と話したか時間数で記入してください、の結果についてはテスト結果と絡めて後述する(表 6, 表 7)。

次に、事前・事後敬語テスト結果(表 5)、事前テストの得点上位者 25%の 11 名と他 33 名の事前アンケート(質問 6～質問 9)結果の平均比較(表 6)、得点が伸びた 13 名と他 31 名の事前アンケート(質問 6～質問 9)結果の平均比較(表 7)は以下である。

表 5. 事前・事後敬語テスト結果 (n=44)

	事前平均値① (標準偏差)	事後平均値② (標準偏差)	差①-②	t 値
全体	5.52 (2.72)	10.32 (2.35)	-4.80	-11.43*
11 名	9.36 (3.94)	11.91 (2.61)	-2.55	-4.82*
33 名	4.24 (2.16)	9.79 (2.26)	-5.55	-11.93*
13 名	3.08 (1.33)	11.15 (1.46)	-8.08	-18.76*
31 名	6.55 (2.49)	9.97 (2.56)	-3.42	-10.15*

* $p < 0.01$

表 6. 事前得点上位 11 名と他 33 名の平均比較

	11 名平均	33 名平均
読書冊数	0.27 冊/月	1.13 冊/月
アルバイト時間	16.27 時間/週	4.26 時間/週
地域の人々との会話	3.69 分/週	—
学内で教員や職員との会話	36.78 分/週	9.85 分/週

表 7. 得点が伸びた 13 名と他 31 名の平均比較

	13 名平均	31 名平均
読書冊数	1.96 冊/月	0.48 冊/月
アルバイト時間	3.77 時間/週	8.73 時間/週
地域の人々との会話	—	1.31 分/週
学内で教員や職員との会話	22.69 分/週	14.02 分/週

仮説①に関する考察: 事前テストと事後テストの平均点の差が統計的に有意か確かめるために、全体 (n=44)、事前敬語テストの得点上位 25%の 11 名、それ以外の 33 名と、それぞれ有意水準 1%

で対応のある t 検定(両側検定)を施したところ、全体値、11 名値、33 名値と、すべてにおいて、その差は有意であることが分かった。これにより、授業内容の効果が統計的に示唆された。また、事前、事後テスト受験学生の 9 割以上が、事前テストよりも事後テストの方が得点が高く、授業内での実践練習や、授業外での経験を含む、協働評価学修を取り入れた経験学修サイクルの効果が認められる可能性が示唆された。よって、仮説①協働評価学修を取り入れた経験学修の実践は学生の敬語力向上に有効である、は支持された。

仮説②に関する考察: 表 6 にある 1 週間の読書冊数について見てみると、事前敬語テストの得点上位 25%の 11 名の平均値は 0.27 冊、それ以外の 33 名の平均値は 1.13 冊と、それ以外の 33 名の平均値の方が 0.86 ポイント高く、仮説②本をよく読む学生は、そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ、は支持されなかった。しかしながら、事前テストから事後テストにかけて最も得点上昇率が高かった学生(事前 3→事後 15)は、過去 1 か月に最も読書冊数が多かった(5 冊/1 か月)。

仮説③に関する考察: 表 6 にある 1 週間のアルバイト時間数について見てみると、事前敬語テストの得点上位 25%の 11 名の平均値は 16.27 時間、それ以外の 33 名の平均値は 4.26 時間と、得点上位 25%の 11 名の平均値の方が 12.01 ポイント高く、仮説③長時間アルバイトをしている学生は、そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ、は支持された。この結果については、ほぼ全員の学生のアルバイトの仕事内容が接客業であり、お客様に敬語を使って話す機会に恵まれていたことによるものであると考えられる。

仮説④に関する考察: 表 6 にある 1 週間の地域の人々との会話時間数について見てみると、事前敬語テストの得点上位 25%の 11 名の平均値は 3.69 分、それ以外の 33 名の平均値は 0 分と、得点上位 25%の 11 名の平均値の方が 3.69 ポイント高く、仮説④地域住民との触れ合いが多い学生は、そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ、は支持された。しかしながら、その平均値は 1 週間で 5 分にも満たず、今後、積極的に地域の人々とのコミュニケーションを図るよう、学生には更なる指導の必要性が挙げられる。

仮説⑤に関する考察: 表 6 にある 1 週間における学内での教員や職員との会話時間について見て

みると、事前敬語テストの得点上位 25%の 11 名の平均値は 36.78 分、それ以外の 33 名の平均値は 9.85 分と、得点上位 25%の 11 名の平均値の方が 26.93 ポイント高く、仮説⑤学内で教員との会話が多い学生は、そうでない学生と比較して高い敬語力を持つ、は支持された。この結果より、学生側だけでなく教員側も、学生の敬語力向上を目指すべく、今まで以上に学生と直接会話する等、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が求められる。

4.2. 事後アンケート結果、考察

事後アンケートの結果、考察は以下である。なお、大カッコ内の数値については、【左側の数値は上昇率の高い学生数、右側の数値はその他の学生数】とする。

質問 1: 授業（経験学修サイクルの実践を含む）を受けて、敬語力が身に付いたと思いますか。

思う 44 【13, 31】名 (100.0%)

思わない 0 【－】名 (－)

わからない 0 【－】名 (－)

質問 2: 質問 1 の理由について述べてください（紙幅の都合上、記述内容の要点を纏めて一部を抜粋した）。

- ・ 普段の生活でスムーズに話せるようになったから 21 【10, 11】名 (47.7%)
- ・ 周りの人（クラスメイト等）に評価されたから 12 【3, 9】名 (27.3%)
- ・ アルバイト先の上司に言葉遣いを褒められたから 9 【0, 9】名 (20.5%)
- ・ 授業で何度も練習したから 1 【0, 1】名 (2.3%)
- ・ 以前より敬語を話す機会が増えたから 1 【0, 1】名 (2.3%)

考察：経験学修サイクルの実践を含む、「日本語Ⅱ」の授業を通じて敬語力が身に付いたかという質問に対して、受講学生全員が「敬語力が身に付いたと思う」と回答した。その理由について、得点上昇率の高い受講学生は、それ以外の受講学生と比較して、「普段の生活でスムーズに話せるようになったから」等、自身の自覚に依る理由を挙げる割合が高かった。次いで、「周りの人（クラスメイト等）」に評価されたから」など、授業内で実施し

た協働評価学修に関連する回答が挙げられ、ここに、協働評価学修効果の可能性が示唆された。

その他、自身の敬語力が身に付いたと思う理由として、「アルバイト先の上司に言葉遣いを褒められたから」「授業で何度も練習したから」「以前より敬語を話す機会が増えたから」等が挙げられた。

4.3. 事後聞き取り調査結果、考察

授業終了後に一人 10 分から 20 分程度で実施した事後聞き取り調査の結果、考察は以下である。調査対象学生はランダムに抽出した 8 名であり、内訳は事前テストから事後テストにかけて、高く得点の伸びた受講学生 13 名の中の 3 名と、それ以外の 31 名の中の 5 名とした。なお、紙幅の都合上、記述内容の要点を纏めて一部を抜粋した。

質問 1: 経験学修サイクルを実践してみていかがでしたか。上手くできたと思いますか。

【上昇率の高い学生 3 名の回答】

- ・ 授業で学んだことを実際に経験することによって多くの学びを得ることが出来ました。
- ・ 特に敬語を話すことに関しては、頭では理解していても話せないものだということが分かりました。
- ・ 普段の生活の中でスムーズに敬語で話すことの難しさを体験することが出来ました。大変勉強になりました。

【その他の学生 5 名の回答】

- ・ 最初は実践の意味が理解できず、上手くできませんでしたが、後半は上手くできていたと思います。(3 名)
- ・ 授業前よりは話せるようになったと思いますが、まだ自信がありません。(1 名)
- ・ 実際に話すことは難しいことだと思います。(1 名)

考察：記述式事後アンケートでは詳しく明らかにすることが出来なかった経験学修サイクル実践後の感想について質問し、上昇率の高い学生 3 名の回答と、その他の学生 5 名の回答を比較したところ、回答内容に、それほど大きな違いはなかった。しかしながら、上昇率の高い学生 3 名の回答は、経験学修サイクルをポジティブなものとして捉え、それが自身のコミュニケーション能力向上に繋がっていると意識している様子が伝わって

るものであった。一方、その他の学生 5 名の回答は、授業を受ける前よりは敬語力が身に付いているのだろうが、まだまだ自身の能力に自信が持てない、とも捉えられるネガティブなものが目立った。この結果より、事前テストと事後テストの得点を数値で表記することより、自身の能力向上を可視化できるため、敬語テストの得点が高がることで、より強固な自信に繋がるという、心理的要因の存在が示唆された。

質問 2: 授業で敬語が身に付いたと思いますか。そう思う理由も教えてください。

【上昇率の高い学生 3 名の回答】

- ・ 思います。授業内でロールプレイングをして、徐々に上手く話せるようになったと自覚することが出来ました。ロールプレイングを一緒にしたペアの方にも高い評価を貰えました。
- ・ はい、思います。アルバイトでお客様と話をする時にスムーズに話せるようになりました。以前は、言葉遣いに自信が持てませんでした。今は自信を持って話をすることが出来るようになりました。授業のお陰だと思っています。
- ・ 自分では、そう思っています。授業中の協働評価で、先生や友人などに言葉遣いを褒めてもらえて自信ができました。

【その他の学生 5 名の回答】

- ・ 身に付いたと思います。授業前はほとんど敬語を意識したことが無かったのですが、この科目を受講することで自分の言葉遣いについて意識するようになりました。(2 名)
- ・ 授業前の自分と比べたら、敬語力が身に付いたと思います。クラスメイトからも褒められました。(2 名)
- ・ 授業でいろいろ学べたし、実際にスムーズに話せるようになったと思うので、身に付いたと思っています。(1 名)

考察: 授業で敬語力を身に付けることが出来たか、また、その理由についても質問したところ、上昇率の高い学生 3 名の回答、その他の学生 5 名の回答ともに、協働評価学修の効果に関する回答が含まれていた。協働評価学修について質問すると、どの受講学生も協働評価学修を前向きに捉えており、友人などのクラスメイトから褒められることが自らの自信に繋がり、それがプラスの記憶とし

て残りやすくなるのではないかという可能性が示唆された。

質問 3: この科目で得た学びを、今後どこで、どのように活かそうと思いますか。

【上昇率の高い学生 3 名の回答】

- ・ 今後、社会に出たら仕事をする上で、この学びを積極的に活かそうと思っています。
- ・ 在学中はアルバイトで活かせると思います。卒業後は企業で活かせると思います。
- ・ 部活で先輩とコミュニケーションを取る時に活かせると思います。就職後も、もちろん活かせると思っています。

【その他の学生 5 名の回答】

- ・ 今後、仕事でお客様や上司とコミュニケーションを取ることになるので、その時に必ず活かせると思う。(3 名)
- ・ 目上の人と話をする時に活かせると思います。(1 名)
- ・ まずは、これから本格化する就職活動で活かせると思います。(1 名)

考察: この科目での学びを、今後どこで、どのように活かそうと思うかの質問に対しては、上昇率の高い学生 3 名の回答と、その他の学生 5 名の回答は、ほぼ同様に、就職活動、アルバイト、卒業後の進路における、人とのコミュニケーションの場面で学びを活かせるということであった。

5. おわりに

本研究では、学生が卒業後に企業等で働く際、必要とされる敬語力育成を目指し、筆者の担当する日本語科目の授業内で「協働評価学修を取り入れた経験学修サイクル」を実践した。

実践の結果、定量的データ、定性的データの両方より授業効果を確認することができ、さらに、記述式アンケート結果、聞き取り調査結果より、受講学生の敬語力をはじめとするコミュニケーション能力が育成される可能性を確認することができた。

今後も、このような調査を継続していく所存である。さらに、より多くのデータを収集、分析し、これらの結果を一般化させ、受講学生がコミュニケーション能力を身に付けることが可能となる教育プログラムの構築に貢献したいと考えている。

引用文献

- [1]杉本亜由美. 短期大学における敬語教育に関する考察. ビジネス実務論集. 2019, 第 37 号, p.119-128.
- [2]蒲谷宏. 待遇コミュニケーション教育としての「敬語教育」の考え方ー敬語教育への新視点ー. 日本語学. 2017, 第 6 号, p.64-74.
- [3]菅井郁. 自由が丘産能短期大学生の敬語意識ーアンケート調査結果からの考察ー. 自由が丘産能短期大学紀要. 2009, 第 42 号, p.39-59.
- [4]宮本克之. 敬語教育のあり方についての考察. 甲子園短期大学紀要. 2007, 第 26 号, p.91-96.
- [5] David Allen Kolb. Experiential Learning : Experience as the Source of Learning and Development. Prentice-Hall, 1984.
- [6] 杉本亜由美. エージェンシー育成に繋がるビジネス実務科目における協働評価学修を取り入れた経験学修サイクルの考察. ビジネス実務論集. 2024, 第 42 号, p.89-98.
- [7]真田治子ほか. 大学生のための実用日本語表現ドリル. 三省堂. 2019.

Abstract

In this study, we implemented an experience-based learning model for first-year students at a higher education institution, which aims to cultivate “honorific language skills” through Japanese language courses and provides time for students to think about and practice their own learning goals and learning plans (experiential learning outside of class time) and to collaboratively review their own experiences (collaborative evaluation learning), rather than goals given by instructors. We implemented an experiential learning model. The effectiveness of the practice was measured objectively by the honorifics test administered before and after the class, and subjectively by the class questionnaire administered before and after the class. The results of the survey confirmed both quantitative and qualitative data on the effectiveness of the class, and the descriptive questionnaire results indicated that the students' “ability to speak respectfully” may have been fostered. The students with the highest score increase from the pre-test to the post-test also read the most books in the past month. The correlation between the top 25% of students in the pre-test and the post-test was also confirmed in terms of “the length of time spent working part-time per week,” “the length of time spent talking with people in the community per week,” and “the length of time spent talking with faculty and staff on campus per week.”

(受付日 : 2024 年 12 月 19 日, 受理日 : 2025 年 8 月 28 日)

杉本 亜由美 (すぎもと あゆみ)

現職 : 高田短期大学キャリア育成学科専任講師

プロフィール :

成蹊大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学.

専門は日本語教育, キャリア教育.

東京都生まれ. 成蹊大学大学院文学研究科, 民間企業を経て, 現在, 学校法人高田学苑に勤務.

主な著書, 論文 :

杉本亜由美. 日本語科目における古典教育プログラムの実践. 人間生活文化研究. 34, 2024, p.287-293.

杉本亜由美. 初年次学生による小論文の構造分析に関する考察. 人間生活文化研究. 33, 2023, p.63-68.

杉本亜由美. 日本語科目における相互評価に関する考察. 人間生活文化研究. 33, 2023, p.575-584. など